氏名	友常　聖武
ヨミガナ	トモツネ　トシタケ
学位の種類	博士(音楽)
学位記番号	博音第343号
学位授与年月日	令和2年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 都山流尺八の手付けに関する研究 ―下行音型に伴う拍子外音符の考察― 〈演奏〉　菊崎検校：西行桜(16分)ほか

論文等審査委員

(主査)	東京藝術大学	教授	(音楽研究科)	萩岡　松韻
(副査)	東京藝術大学	准教授	(音楽研究科)	上條　妙子
(副査)	東京藝術大学	非常勤講師	(音楽研究科)	藤原　圭太
(副査)	尺八演奏家			竹村　文宏
(副査)	東京藝術大学	教授	(音楽研究科)	塚原　康子
(副査)	東京藝術大学	教授	(音楽研究科)	杉本　和寛

(論文内容の要旨)

本論文では下行音型に含まれる拍子外音符について研究を進めた。この下行音型とは、尺八音楽の多くの曲で使用されている「陰旋法上三つの連続する音階音で構成された下行音型」のことである。

第一章では流祖中尾都山の古曲手付け活動、都山流本曲作曲、楽譜公刊に至る足跡についてまとめた。菊筋系統の手を中心に手付けを行っていた事、また山田流との交友関係では、初代上原真佐喜だけではなく、初代及び二代萩岡松韻との演奏を通した交流があった事を明らかにした。

第二章では尺八奏法に関する用語、楽譜、旋法について調査した。「あしらう」を「楽譜上の表記は無いが、音から音への移り際に装飾的に音を加える」、「指のあしらい方」を「楽譜上の表記は無いが、音から音への移り際に装飾的に加える指孔の開閉手順、運指法」と定義した。本論文テーマの下行音型について、中間音が拍子外音符表記の場合だけではなく、「付点八分音符+十六分音符」における十六分音符表記の場合と、連続した十六分音符の最後の部分として表記の場合に拍子外音符の如く奏する事がわかった(本論文ではこれを「擬似的拍子外音符」と名付けた)。

第三章では複符運指の実態と指孔開閉速度の影響について調査を進め、「ゆる」場合、「打つ」場合の複符運指時の差し込まれる瞬間音は、各音符によってその音程差に違いがあることを明らかにした。尺八という楽器の性質上、複符運指による瞬間音は音によって違いがある。それぞれ固有の瞬間音をもった音によって、各調子固有の特徴が生まれてくると考えた。

第四章では古曲、第五章では都山流本曲、それぞれの曲種における陰旋法上の三連続音階音下行音型に含まれる拍子外音符及び擬似的拍子外音符の奏法がどのようであるか、拍子外音符が「角音」「羽音」「徵音」の場合、三種について、あしらい方とその音の推移を調査した。またそれらがどれくらいの曲数(陰旋法に基づいた曲)に使われているかを調査した結果、「角音」「羽音」の場合はすべての曲に使用されており、特に**ロ**調陰旋法、**レ**調陰旋法の場合はほとんどの曲で使用されており、この音型の吹奏技術取得の重要度が高いことが窺える。

第六章では、古曲の原旋律に対して、陰旋法上の三連続音階音下行音型の間に含まれる拍子外音符及び擬似的拍子外音符がどのように手付けされているか五線譜化を試み、調査を行った。その結果、手付け方法を16種類に分類化することができた。また各楽器による中間音の音程差について明らかにし、調子によって音の推移、音の重なり方が違うことが判明した。

以上、都山流尺八音楽における陰旋法上の三連続音階音下行音型について、中間音の表記の仕方(拍子

外音符及び擬似的拍子外音符)、奏法と実際の音の推移、原旋律への手付け方法という観点で研究を進め、曲種の違い、調の違いによる特徴を明らかにした。

◎都山流尺八における拍子外音符

①洋楽でいう装飾音符に相当する。

②譜上には表記されていない特別な技巧を要する場合がある。

③同じ符字であっても状況により吹奏法が異なる。

◎陰旋法上の三連続音階音下行音型の中間音（経過音）の特徴

①中間音（経過音）は、拍子外音符表記の場合と擬似的拍子外音符表記（「付点八分音符＋十六分音符」における十六分音符表記と連続した十六分音符の最後の部分として表記）の場合があり、前者では、音型開始音が四分音符以上の長さの時に使われ、後者は音型開始音が四分音符未満の長さの場合に使われている。どちらも拍子外音符の如く吹奏する。

②古曲合奏（外曲）との時と本曲の時では吹奏法が異なる。

③経過音が「角音」、「羽音」、「徴音」の場合、個別のあしらい方がある。運指による瞬間音により、各調子固有の音の推移がうまれる。

④古曲合奏では、原旋律に対して16種類の手付け方法がある。

⑤古曲合奏において、経過音が「羽音」の場合、各楽器の経過音に違いがあり、固有の音の推移がある。これらが重なる時の音程差が調子によって違った。これにより各調子固有の音の重なりが生まれている。

◎**【フラ】**について

①拍子外音符表記のみである。

②陰旋法上では**レ**調陰旋法で使用され、角音に相当する。

③古曲の場合前後の開始音、帰着音が四分音符の以上の長さである。

④古曲において、**【フラ】**と**ロハチ**は原旋律に対する手付けパターンに区別はないが、**【フラ】**を使用することで他の調には見られない**レ**調陰旋法独自の音の推移を生み出す。

⑤都山流本曲において、**【フラ】**を使用することで、他の調と同じ相対的な音の推移を求めている。

都山流尺八では、表記上同じ符字であったとしても、曲種、前後の音（調子）によって拍子外音符及び擬似的拍子外音符の吹奏法が変わる。表記にはないが決まった奏法としてあしらいを加えることで、各調子固有の音の推移を生み出している。また、古曲合奏でも各調子固有の音の重なりを生み出していることが明らかになった。演奏の際、拍子外音符の吹奏がいかに重要であるか、音から音への移行、ここに都山流尺八の独自性が現れてくることが、本論文で明らかとなった。

（総合審査結果の要旨）

この論文は、尺八音楽で使用されている「陰旋法上三つの連続する音階で構成された下行音型」を考察したもので、第一章は、流祖中尾都山の古典手付活動、第二章は尺八奏法に関する用語、第三章では複符運指の実態と指孔開閉速度の影響について調査をした。また、第四章では古典、第五章では尺八本曲、第六章では古典の原旋律に対して、陰旋法上三連続音階音下行音型の間に含まれる拍子外音符及び擬似的拍子外音符がどのように手付けされているか五線譜化を試み調査した。

以上研究考察したもので尺八の二大流派である、琴古流と都山流であるが、同じ楽器を使っていながら、その演奏スタイルは異なる印象を与えるもので、大きな違いは、音を出す時の運指法（アタリ）で、もう一つは、今回の論文テーマの下行音型の装飾音である。

今まで文章化することのなかった意義のある論文である。また、演奏「西行桜」「寒山」「小督曲」も良く曲の性根を解釈した演奏で良演でした。